〈巻頭言〉

特集号にあたって
――結成一〇年を振り返りつつ――

東アジア思想文化研究会・編集委員会

東アジア思想文化研究会が結成されたのは二〇〇五年四月のことである。以来一〇年、ほぼ月一回から二回、定例研究会を開催してきた。報告者は、主として京都へ中国・韓国・アメリカ・ドイツ・イタリア・スペインなどから留学してきた大学院生であり、関西近辺の人文学研究者や日本人大学院生を交えて、修士論文・博士論文作成に向けた検討などを行ってきた。それらの成果については、『東アジアの思想と文化』一～六号として公刊し、各方面から高い評価を得てきた。

これと並行して、中国・韓国・台湾の大学・研究機関との共同シンポジウムも積極的に開催してきた。具体的には、中国広東外語外貿大学（二〇一〇年）、南開大学（二〇一三年）、ハルピン師範大学（二〇一五年）、韓国高麗大学校（二〇〇九・二〇一五年）、全北大学校（二〇〇九・二〇一〇・二〇一二年）、江原大学校（二〇一四年）、台湾国立台湾大学（二〇一二年）などと、共同シンポジウムを開催してきた。このほか、二〇〇八年から九年にかけては、『朝鮮史』研究会を共催し、その成果については『季刊日本思想史』七六号（ぺりかん社、二〇一〇年）として公刊した。現在は、東アジア史学思想史研究会を共催中で、この成果についても単著として二〇一八年には公刊する計画である。

ここに掲載するのは、二〇一五年一月二四～二五日に、立命館大学で開催された「二〇一五　ソウル・京都東アジア次世代国際学術大会」（本会と高麗大学校ＢＫ２１プラス中日言語文化教育研究事業団の共催）で発表された研究報告の一部である。諸般の事情で掲載に至らなかったものも多いが、この大会では日中韓の大学院生、若手研究者による、きわめて多彩で、独創性に富む研究報告が数多く行われた（総数五九本）。高麗大学校とは、二〇〇九年に共同シンポジ

ウムを開催したことを契機に、二〇一四～一五年には、遠隔テレビ会議室方式による定例研究会を共同で実施してきた。今後も引き続き学術交流を継続していく計画であり、その成果についても、いずれ公刊されることになっている。ところで、この大会の特徴としては、日中韓の通訳が介在しつつも、一方では日本語・中国語・韓国語が飛び交いながら運営されたことであり、多くの参加者が日中・日韓・韓中の二カ国語に通じていたことである。未だ少数ではあるものの、三ヵ国語に堪能な者も参加していた。本会では、『東アジアの思想と文化』誌も含め、日中韓三カ国語のトリリンガルな運用を会の運営方針としており、その意味では、今後の東アジアの学術交流の方向性を象徴する大会になったと実感している。

時あたかも、日中韓政府間では、とりわけ安倍政権の東アジアとの向き合い方の問題性により、戦後最悪といわれる軋轢が生じている（「領土問題」「歴史認識問題」「従軍慰安婦問題」など）。しかしら、東アジアの未来を担うのは、バイリンガル・トリリンガルな言語理解を有し、軽やかに国境を越えていく、本大会に参加したような若手研究者たちであることは間違いない。完成途上の研究も含まれていることは承知しているものの、こうした近未来を先取する研究姿勢といえるものを、本誌収録の各論考から読み取っていただければ幸いである。会としても、今後も日本語のみならず、中国語・韓国語・英語などの論文掲載に努め、それを本誌の一つの特徴としていく所存である。大方のご理解とご支援をお願いする次第である（二〇一五年七月）。